



## 第36期第2回京都市社会教育委員会議の模様をマナビィがレポート！

令和5年12月25日（月）、[京都市青少年科学センター](#)（以下、科学センター）において、第36期京都市社会教育委員会議の第2回目となる会議が開催されました。「つながりを活かした博物館の取組」について議論されました。

### ■ 出席委員（17名のうち15名） ※五十音順

伊住 禮次郎 委員、ウスビ・サコ 委員、大脇 晋太郎 委員、佐竹 美都子委員、  
園部 晋吾 委員、豊田 まゆみ 委員、永田 紅 委員、七海 薫子 委員、  
二宮 靖男 委員、原 敏之 委員、本郷 真紹 委員、榎木 良子 委員、  
松田 規久子 委員、森 清頭 委員、森口 真希 委員

### 第36期第2回社会教育委員会議次第

開 会

前回欠席委員自己紹介

#### 1 議 事「つながりを活かした博物館の取組」について

- (1) 京都市内博物館施設連絡協議会（京博連）の取組について
- (2) 青少年科学センターの取組紹介・施設見学
- (3) 協議

#### 2 報 告

- (1) 京（みやこ）まナビィニュースレターについて
- (2) 京都市生涯学習市民フォーラム 令和5年度総会について
- (3) 令和5年度近畿地区社会教育研究大会（滋賀大会）について

#### 3 主催事業及び刊行物の案内

閉 会

### ■ 稲田教育長挨拶

#### ■ 自己紹介

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

西陣織という伝統文化に携わる仕事をしながら、ヨット競技で2004年アテネオリンピックに出場しました。会議では私が学ぶことも多く、社会に還元できるように務めさせていただきます。



## ■ 議 事「つながりを活かした博物館の取組」について

○ 事務局説明（生涯学習部 北村博物館事業振興係長）

[京都市内博物館施設連絡協議会（以下、京博連）](#)は、京都市内の博物館施設相互の交流と協力によって、博物館活動の発展を図り、文化の向上に寄与することを目的に設立されました。現在209館が加盟し、博物館講座や、加盟館を巡るスタンプラリー『[京都ミュージアムロード](#)』等を行っています。



○ 事務局説明（京都市青少年科学センター 谷野市民科学事業課長）

### 1 他の博物館施設等との連携について

科学センターは、「京都市科学系博物館等連絡協議会（科博連）」に加盟し、広報協力や「科博連サイエンスフェスティバル」を実施しています。また、自然科学系博物館4園館で「きょうと☆いのちかがやく博物館」連携協定を締結し、各館の専門性を生かした共同企画を実施しています。

### 2 大学等との連携について

「青少年のための科学の祭典」等イベントへの出展、当センターでの学生のフィールドワークの実施、オフィシャルグッズの開発等を複数の大学と連携して行っています。

### 3 企業・団体等との連携について

企業による最先端の技術を生かした実験教室（未来のサイエンティスト養成事業）や、京都の企業に自社の技術や特色を生かした体験型の展示品を提供いただき「企業特別展」を開催しています。

また、子どもたちの社会の創り手として必要となる能力を育成することを目的に、株式会社村田製作所と、STEAM 教育（※1）を通じた次世代育成のための包括連携協定を締結し、事業等の充実のため1億円の寄付をいただきました。

企業は「効果的なCSR（※2）活動」ができるステージを求めていますので、一方的に支援を受けるのではなく、企業にもメリットのある形でのウィンウィンな関係作りができないかと考えています。

※1 STEAM（スティーム）教育とは  
Science（科学）、Technology（技術）、Engineering（工学）、Art（芸術と教養）、Mathematics（数学）の頭文字をとった教科等横断的な学習。

※2 CSRとは  
Corporate Social Responsibility（企業の社会的責任）のこと。

### 4 京都市各部局との連携について

京都市上下水道局、京都市衛生環境研究所等と連携して「未来のサイエンティスト養成事業」を実施しています。今後は、STEAM 教育の観点から、京都市立病院、消防署、市立芸術大学などとの連携を模索したいと考えています。



開館から54年間、京都市の理科教育の中核施設として様々な事業を進めてきた実績を「科学センターブランド」として最大限に生かし、求められていることを常に考えながら理科のおもしろさを発信していきたいと考えています。

科学センターの取組説明の後、施設を見学したよ。



○ 森 清頭 委員（北法相宗宗務長、清水寺執事、上智大学グリーンフケア研究所非常勤講師）

博物館の連携について、展示に関係のある場所や寺社など、他の施設も巻き込み、点ではなく面の形で企画運営すると面白そうだと思います。

また、科学センターのアクセス方法がわかりにくく感じました。駐車台数やバスでのアクセス方法、周辺のコインパーキングの情報もあれば良いです。走らせるのは大変ですが、循環バスもあると便利かと思いました。



○ ウスビ・サコ 委員（京都精華大学前学長、人間環境デザインプログラム教授）

科学センターは、施設としては展示されている点数もかなり多く、様々なものがあり、充実していると感じました。

私も京都精華大学の博物館長をしていますが、寄贈が増え、物が多すぎて置く場所がなかったり、収蔵品が眠ったままで出せない状況にあります。この間、東京で開催された全国の博物館の会議でも、どの博物館も場所が問題になっていました。日本ではあまり行っていませんが、除却のことも課題です。保管する期間についてはあまり整理されていません。10年ぐらい先を見越して新しい保管場所を考えないといけない。今後、寄贈や貸借する仕組みの整備が必要ですが、京都市内の博物館同士の交流があれば、「〇〇博物館の収蔵品が、一時的に△△で展示される」などの取組ができると思います。収蔵品を借りるための制度や協定など、条件についても教えていただきたいです。



また、STEAM教育について、アートの部分がどこに入ってくるのかと思いました。科学センターに来た子どもたちのクリエイティビティをどのようにつなげていくかが大切です。そのために、京都の文化や芸術などとのコラボレーションも重要です。そのような交流について、どのように考えておられますか。

○ 事務局（京都市青少年科学センター 谷野市民科学事業課長）

収蔵品は、寄贈等により非常に多くあります。整理が進んでいませんでしたが、去年から人員を配置してもらい、力を入れて取り組んでいます。

収蔵品の貸出について、例えばタルボサウルスの頭骨は、昨年度、福井大学に貸出をしました。また、先日、NHKの連続テレビ小説「らんまん」の関連で「牧野富太郎博士ゆかりの植物標本展」を開催しました。科学センターには、牧野博士が実際に作った標本はありませんが、標本を多く所蔵する京都薬用植物園からお借りして、展示しました。博物館施設同士では、文書でやりとりし、貸出を活発に行っています。

また、STEAM教育のアートの部分ですが、展示に反映させていくには、計画が必要で、今後の話になるかと思っています。京都市立芸術大学や京都美術工芸高校などとも連携して、事業を始めたいと考えています。



○ 伊住 禮次朗 委員（茶道総合資料館副館長）

私は、京博連の幹事をしています。京博連は、他都市では見られない非常に大きなネットワーク組織です。博物館には、動物園や水族館、美術館、資料館と様々なものを含みますが、緩やかな連帯があり、顔を知っていると、仕事をするうえでもスムーズに連絡が取れ、大変ありがたい取組だと思っています。



科学センターでも、科学という専門性を生かして連携をされていると聞き、感銘を受けました。私が副館長を務めている茶道総合資料館において、日本画と茶道具をテーマに、今出川通周辺に位置する美術館5館で連携し、『京都・今出川通の美術館だより』の発行に携わっています。京博連では、小さなコミュニティの取組が見えにくいので、そのような情報が入ってくると、それぞれの状況を理解しながら、全体の動きを提案しやすいと思いました。

ウスビ・サコ委員がおっしゃったように、博物館の一番重要なポイントは収蔵庫です。表向きのところを整えることには予算が出やすいですが、収蔵庫の整備には予算がつきにくいです。基本的に収蔵品は減らないので、どこの収蔵庫もギリギリの状態、それを各館で抱えるには限界が出てきています。京博連などの博物館ネットワークの中で、収蔵庫の問題について本気で考えていく必要があります。

○ 森口 真希 委員（株式会社堀場製作所 理事 管理本部副本部長）

これからの企業との連携の方向性に希望を感じました。企業の CSR というこれまでの言葉は、さらに大きくとらえられるようになり、ESG（Environment（環境）、Social（社会）、Governance（ガバナンス／企業統治））への貢献、すなわち地球環境や社会の Sustainability（持続可能性）をより重視しています。京都企業として京都からグローバルにどのように良い人財を輩出し、より良い社会にしていくのか、ということも大きなテーマです。弊社会長の堀場厚が会長を務める「京都教育懇話会」の活動も長く継続されています。また、企業と大学が連携して取り組む「京都クオリアフォーラム」など、様々な活動の中で事業の枠を超えて、融合させようという意思を感じます。全てを重ねるのは難しいですが、少しずつでも接点を増やしていくと、広がりができるのではないかと考えています。



また、移転した[京都市立芸術大学](#)の音楽ホールに、「堀場信吉記念ホール」という名前を付けていただきました。創業者の父（元 京都帝国大学 理学部教授、化学研究所所長 堀場信吉氏）が芸大音楽学部の前身である京都市立音楽短期大学の初代学長を務めていたご縁がつながりました。このホールをきっかけに社員が足を運ぶ機会も増えますし、サイエンスやアート、企業と教育機関、それぞれの枠を超えてこういった接点を増やしていくことは、地道ですが大事なことだと思います。

○ 大脇 晋太郎 委員（市民公募委員）

まず、公共団体と民間企業の連携については、メセナ（企業が行う文化や芸術への支援活動）と広報宣伝に限定されることが多いですが、採用に関連して、企業の研究成果の発表の場を提供する、大学生・高校生のインターンの受入を行うのはどうでしょうか。採用においては、企業は多額の資本を投下するので、企業側にもメリットとなり、多くの資本を提供してもらえる可能性があります。

もう1つは、アライアンス（企業間の連携）の組み方をもう一度考え直してみたいかでしょうか。3、4年前、福井県の施設で、妖怪に関する展示が開催され、入館記録を作ったとネットニュースで見ました。妖怪は、主に人文科学の分野で扱われますが、自然科学の切り口から展示を行い、入館者が増えたと解説されていました。サイエンスというテーマでアライアンスを組むと、そのような発想が出てきません。同じ博物館同士では、コンテンツが限られてしまう弱点があります。全く違う業種に飛び込み、提案をして、手を組んでいくことも、この先の運営の中では良いヒントになるのではないかと思います。



○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学特任助教）

まず、京都市に200以上の博物館があることを初めて知り、行ってみたいと思いました。旅先では博物館などをよく訪れますが、住んでいるとなかなか行かないですね。スタンプラリーはふつう、数が多過ぎてなかなかコンプリートできないものですが、京都ミュージアムロードの3つというのはちょうどいいです。



子どもたちの居場所が今、求められています。不登校の子どもたちがボランティアとして、来館者にガイドする等の活動できる機会があると良いと思いました。また、学芸員という仕事についての紹介セミナーがあったら面白い。社会には、このような仕事があり、こういう形で関わっていけることを知る機会になります。

科学センターのグッズについては、コラボ・連携の余地があるところです。アートとサイエンスの関わりとしてグッズを作るのも良いと思いました。

○ 事務局（宮前生涯学習部長）

京都市では「[生き方探究・チャレンジ体験](#)」という中学生の職業体験事業を実施しています。その中で、普段学校に行けていない子どもや学校に馴染めていない子どもも、企業や保育園などに行き、様々な人と触れ合う中で、新しいことを学ぶ機会となっています。今後も広げていきたいと思っています。

また、学芸員については人件費が確保できず、採用の枠が少なくなっております。待遇の改善を含めて、課題であると思っています。

○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

京都国立博物館では、学芸員の仕事が忙しいため、大学生・大学院生が学芸員からレクチャーを受けて「文化財ソムリエ」となって、小・中学校に出張授業に行き活動しているそうです。これは、大学生にとっては、学芸員という仕事について学べる時間であり、小・中学生にとっても、身近なお兄さんお姉さんが教えてくれる良い時間にもなり、博物館にとっても、教えるために学生がもう一度博物館に行く機会ができ、良いサイクルになるのではないかと思います。それぞれの博物館で積極的にこのような活動をしていただければと思います。



京都市観光協会では、毎年、NHK大河ドラマ関連等のテーマを設定され、テーマに関連した収蔵品の公開を行い、集客を図っているようです。京博連では、各館で連携してテーマ設定などはされているのでしょうか。

参考までに、東映太秦映画村には映画図書館があり、映画の台本やDVDを見ることができま

○ 七海 薫子 委員（市民公募委員）



『[京都ミュージアム探訪](#)』を見ながら、施設を見学しています。[京都市学校歴史博物館](#)と[京都市歴史資料館](#)では高齢の70、80代の方がボランティアをされています。学生や若い方にとって、学芸員はハードルが高かったとしても、ボランティアとして関わる機会があれば、若い方の博物館への意識も高まり、良い勉強になるのではないかと感じました。

入館料については、600円以上する施設もありますが、何か学びたいと思ったときに無料であると助かります。[京都市考古資料館](#)や歴史資料館は、無料で京都の歴史が学べるのが良いと感じました。資金繰りも厳しいと思います。本当は国がもっと文化にお金を出すべきだと思います。



○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

確かに入館料には問題があり、かつてはヨーロッパの主だった美術館も全て無料でしたが、最近是有料化しています。特別展は特に高く、国立博物館の特別展では2,500円かかることもあります。少し考え直す必要があると感じています。



○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事委員）

科学センターでは、継続して5・6年生に授業や施設見学が行われています。特に授業の実験は非常に工夫されており、理科が好きではない子どもも興味を示し、とても良かった印象があります。

博物館では、資料の保存などが大変だとよく聞きます。国立科学博物館が、クラウドファンディングでお金を集めたと話題になっていました。後々の人に届けるために、展示物の保存にはお金が必要です。資料の整理をするためにも人材がいる。やはり、企業と連携してウィンウィンの

関係を作り、資本を提供してもらおうのが良いのではないかと感じました。

私の住む地域には元宿場町の歴史があり、その本陣で京都市歴史資料館の方に講演をしていただいたことがあります。区役所の出前講座のように、学芸員が地域に来て、お話をしてもらえるのは貴重な機会です。今後もアクセスが悪くなかなか足を運べないような施設からも、地域に来て講演していただくような企画をしていけたらと思っています。



○ 松田 規久子 委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）

科学センターは、本当に盛りだくさんで、人員も他の館とは違います。また、市内の全小学生が6年生で必ず来るというのはすごいことです。博物館のつながりの中で、科学センターは、他の博物館を引っ張っていく、基幹的な役割を果たす博物館だと思いました。

企業との連携についても、これほど進んだ取組をしている館は他にはありません。他の博物館に対して、こちらの博物館のメリットになることを求めることは必要ですが、博物館の連携の組織の中で皆さんに返していくことが、科学センターに求められている一番の役割ではないかと思いました。科学は、理学の知識、標本学や考古学、アート、全てのきっかけを内包しています。

先ほどの化石の貸出も、できるとわかれば求める館も多いと思います。業務は煩雑になるかもしれませんが、例えばマンガミュージアムで化石を見る、逆に漫画を科学センターで見ると楽しいと思います。そういう連携の中で、ぜひ主導的な役割を果たしていただきたいと思いました。



○ 本郷議長

発信という部分で、新聞社と連携して特集などが組まれたら、科学への関心がより一層盛り上がってくるのではないかと思います。

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

地域の企業との連携も含めて、内容が充実していることに驚きました。科学系に特化した博物館ですので、未来の収益、人的財産、豊かな社会、生きるというところに直結しており、子どもに続けて来てもらうことが必要だと感じました。無料で1回来るだけでなく、自由研究や「もう1回見たい」という行動を促すために、優待券を発行する。また、他の博物館と連携し「○○博物館に行ったら、次は△△博物館に行ってほしい」と、人が集中する期間を外して他の施設の優待券を出されるのも良いかと思いました。子どもたちが続けて学ぶという行動につながるのではないかと思います。



○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー副理事長、山ばな平八茶屋主人）

私の子どもたちも科学センターに行っているのにも関わらず、「また行きたい」とは言わないんですね。それは学習施設というイメージが強すぎるのかなと思いました。ですので、学習すると

ころと展示をもう少し明確に分けられたらいいのかと感じました。

見学してみて、“昭和”を感じました。また、調整中、修理中のものも目立ち、次にもう一回来たいとはならないように思いました。

先ほど、地球の見本、月のデータがありましたが、京都大学からリアルタイムでデータが提供されていることや、「〇〇企業が協力している」とよりわかりやすく示せば、企業側もそこにお金を費やすことができると思います。

科学センターを万博のように、各ブースを企業に持ってもらう形にすると、展示の内容も更新され、新しい今の流れになってくると思います。そのような連携が上手くできれば、現代に近い生きた展示になる気がしました。



○ 原 敏之 委員（日本労働組合総連合会京都府連合会会長）

私も“昭和”だなと、また内容を詰め込みすぎのよう感じました。科学というテーマ、そして小・中学生対象なので、いかに施設に来ていただくかが大切です。そして将来的に科学関係の仕事に就いてもらうためには企業との連携も大切です。京都は学生が多いまちですが、京都に就職して、京都に住む人はそれほど多くないので、そういうところにも一役買っていただければと思います。



○ 二宮 靖男 委員（京都市小学校長会理事、京都市立翔鸞小学校長）

民間企業とコラボするなど、新しい取組をされていることは、学校現場にいて実感しています。条件が限られた中で運営され、苦労があることもよくわかります。

子どもたちは、6年生で行くセンター学習を本当に楽しみにしています。学習後も一日その話で持ちきりで、理科の学習・授業につながっていく様子を毎年見ているので、科学センターはなくてはならない施設です。今後も難しい条件をクリアしながら、一言で言うと、日本の景気がもっと良くなれば、全て解決するのかなと思います。それは私たち全員の仕事でもあるし、頑張っていけないと思います。



学校教育では、この体験学習を通して、子どもたちが社会的・職業的な自立につながるよう、キャリア教育も意識しながらやっていきたいと思っています。そのようなプログラムを示していただけたら大変ありがたいです。

■ 報告-1 京（みやこ）まなびいニュースレターについて

防災をテーマに、災害への備えを学び、ご自身やご家族、地域を守るために役立てていただくことを目的に情報発信しています。右面では豊田委員に、地域でのご活動について防災の観点も含めてコラムを執筆いただきました。

## ■ 報告－2 京都市生涯学習市民フォーラム 令和5年度総会について

市内の生涯学習関係団体からなるネットワーク組織「京都市生涯学習市民フォーラム」の総会を11月に開催しました。松本紘会長から、長年、生涯学習事業の運営に尽力されてきた方への表彰状の授与や、フォーラム副会長の本郷議長のコーディネートで、5つの団体による活動発表を行いました。これを契機に、加盟団体同士のつながりをさらに広げ、活動の充実や連携強化を進めていきたいと考えています。

## ■ 報告－3 令和5年度近畿地区社会教育研究大会（滋賀大会）について

9月に立命館大学びわこくさつキャンパスで開催されました。地域づくりを担う人材の育成や、地域と連携した教育プログラムの開発に従事されている、滋賀県立大学地域共生センターの上田洋平氏が、「ここでともにぶじに生きる」という演題で講演されました。分科会では、長岡京市社会教育委員長から「地域と学校の連携協働を推進する」をテーマに、大学の専門を学びに活かす大学連携の事例の紹介がありました。地域創生に向けた若者の活力を実感した研究会でした。

## ■ 主催事業及び刊行物の案内

### ■ 宮前生涯学習部長挨拶

### ■ 閉会

